

皮遊び

作 T i r a

大学から帰ってきた北斗は紙袋からそれを取り出すと、ワンルームマンションのフロアリングへ伸ばして広げた。「うわあ〜。タイトと言っても、これだけ精密に作られると気持ち悪いな」

足元に広げられたものは、女性を模ったタイトだった。しかし、その生地は布やビニールではなく、まるで人肌のように思える。唇を触ってみると、薄っすらとゴム系の素材が入っているのが、妙に柔らかかった。その唇を開き、中を覗き込んでみたが、口内というものは存在せず、後頭部の裏生地が見えた。

胸元に視線を移すと、喉元から下腹部にかけて長いフラスナーが付いている。二つの胸にはポリウレタン間が無いが、触ってみるとそれなりの柔らかさがあった。

「まるで本物みたいだな。……こ、ここはどうなっているんだろう」

タイトだと言うにも拘らず、彼は顔を赤らめながら女性器に手を伸ばした。指で陰唇を左右に開くと、付き合っている彼女と同じような構造になっている。しかも、何度かセックスやオナニーを経験した事があるような、要は、使用感のある、少しだけ黒ずんだ状態が再現されているのだ。

「すげえ〜、何てリアルな作りなんだ。あいつ、こんなところまでしつかりと作っているんだな。恐れ入るよ。まるで瑞菜ちゃんの体がセックスしているみたいだ」

しばらく眺めていた北斗は胡坐を掻いて座ると、彼の従

妹である美濃鷺瑞菜のタイトを抱き上げた。まるで人毛を使ったようなさらさらとした茶色い髪の毛。そしてタイトの顔に目を近づけると、薄い産毛が生えている事が分かった。

「ここまで精密に作られると、瑞菜ちゃんの皮を剥いたみたいに見えるな。ま、その本人は今頃、学校で部活でもしているだろうけど」

彼はタイトをひっくり返し、滑らかな頂やお尻に手を添えた。触り心地は良いのだが、中身が入っていないので何とも頼りない感じだ。

「よし、そろそろ着てみるか。文男の家に行く事を考えると余り時間がないからな。でも、マジで入るのか？ 俺の体と比べたら、随分と小さいもんな」

立ち上がり、服を脱いだ北斗は全裸のまましゃがむと、タイトの喉元から下腹部に付いているフラスナーを下ろした。まるでジャージーやジャンパーと同じような感覚だ。フラスナーを左右に開くと、外側と同じような肌色の裏生地が広がっている。本当に何も無く、鼻を近づけても匂わなかった。

北斗はタイトを持ったまま立ち上がると、体の前に宛がってみた。つま先を揃えて持つと、タイトの頭は彼の肩くらいの高さにはしかならない。

「こんなに身長差があるのになあ。それだけタイトが伸びるって事か。でも、無理矢理伸びた状態って気持ち悪いだろうな。瑞菜ちゃんには見えないかも。化け物みたいになつたりして」

苦笑した彼は、ライダースーツを着るような感覚でタイトの腰を掴むと、右足をゆっくりと入れ始めた。

足が締め付けられるような感じだ。それでも窮屈すぎで入らない訳ではなく、伸縮性のある瑞菜のタイツは彼の足を受け入れた。破れると困るので、つま先を曲げながらタイツの足に自分の足を合わせてゆく。思ったよりも滑らかな裏生地は、引っかかることなく彼の足を飲み込んでいった。そして、足の指を五本とも差し込み踵が合うと、小さな足の指が自分の足の様に動いた。

「俺の足が小さくなつたみたいだ。完全に入り込んでフィットしてるよ。すげえや」

剛毛の生えた北斗の脛や脹脛は、瑞菜のタイツに包まれた事によってほっそりと、そして滑らかな曲線を描いている。興奮する彼は、左足も同様にタイツの中に滑り込ませた。女性がパンストを穿くような手つきで太ももまで包み込み、興奮して勃起した肉棒までタイツの中に納めてゆく。明らかに入らないと思っていた彼の大きな下半身は、タイツの中へ綺麗に納まってしまった。

「へえ、驚きだな。下半身が完全に入つたよ……」

北斗は両手でタイツのお尻を掴んでみた。不思議な事に、タイツからお尻を触られたという感覚がある。まるで自分の皮膚と同化しているような感じだった。太ももを撫でてみると、皮膚の表面を撫でられた感触がある。

「も、もしかして……」

顔を赤らめた彼は、ドキドキしながらタイツの股間へ指を這わせた。

「はうっ！ な、何だよこれっ！」

初めての感覚に北斗は驚いた。クリトリスに触れた瞬間、下腹部がビクビクと震えたのだ。

「このタイツって、女の快感まで再現できるのかっ！」

す、すげえよ。マジですげえ」

ニヤニヤと嬉しそうに笑いながらタイツを胸元まで引き上げると、自分の身長が随分と低くなっている事に気が付いた。体がタイツに合わせて縮んでいるとしか思えない。

「俺の体が小さくなってる。こんな事って……」

少し戸惑いながらも、両腕をタイツの中に押し込んでゆく。足の時と同じように、太い腕が細いタイツに締め付けられ、指まで入ってしまうとタイツの細さになってしまった。瑞菜本人の細さなのだろう。

肩まで入れた後、背中に垂れ下がっていたマスクの部分を掴み、伸ばしながら被ってゆく。頭から顔を包み込み、両手で引き下ろしながら目や鼻の位置、そして唇を合わせた。

顔がキュツと引き締められた感じに、「うっ」と声を上げると、今まで発していた自分の言葉とは明らかに違うトーンが出た。

「えっ……。こ、声が変わってる。これって……瑞菜ちゃんと同じ声って事なのか」

首まで引き下ろした生地の喉元を触ると、喉仏が殆ど無くなっている。「あ、あ」と何度か声を出してみたが、やはり自分の声ではなく、瑞菜の声になっていた。

「何処まで精密に出来ているんだよ。俺が喋っているのに瑞菜ちゃんの声なんて、違和感アリまくりじゃないか」

それでも、瑞菜の声になって嬉しいのが、北斗は何度か声を出していた。

「いよいよこのファスナーを閉じて……」

彼は下腹部から喉元まであるファスナーをゆっくりと閉じ始めた。左右に広がっていたタイツは、さほど無理せず

とも北斗の体を包み込んでゆく。そして完全にファスナーを閉めると、完全に従妹の瑞菜になってた。

「すげえ……体が全部入ったよ。どういう仕組みになっているんだろう。それにこの胸、ファスナーを締めるとしっかりの中身が詰まって……うわっ、まるで俺の胸みたいだ」

胸を揉むと、揉まれているという感覚が伝わってきた。

北斗の体とタイトの生地が完全にリンクしているのだ。興奮しているのに、肉棒が勃起しているという感覚が無い事も不思議であった。

「へえ」。俺が瑞菜ちゃんになっているんだ。高校生なのに、かなりいいスタイルしてたんだな。こりゃたまらないよ。これなら誰が見ても本人と区別が付かないだろうな。でも、ファスナーがあるからおかしいか。まあいいや、とりあえず、用意した服を着るとするか」

彼は瑞菜のタイトを着たまま、紙袋の中から服を取り出した。女性用の下着と、瑞菜が通っている高校生が着ているセーラー服だ。

「これを着れば……へへへ」

瑞菜の顔で鼻の下を伸ばした北斗が白いパンティに足を通し、身につけたことの無いブラジャーを胸に宛がう。かなり苦労しながらブラジャーを着け終わると、スカートと穿き、セーラー服を身に纏った。

「いいじゃん、本人にしかなえないよ。私、美濃鴛瑞菜。北斗兄ちゃん、よろしくね！……って、うわあ。鼻血が出そうだ。最近は正月に集まってもろくに喋ってくれないから、尚更興奮するよ。でも……」

北斗はセーラー服の胸元から見えるファスナーが気にな

った。殆ど隠れているのだが、やはり見えてしまうのだ。もう少し下から開くようになっていけば、周りから見えなくなるので良かったのに。そう思いながらも、満足げに微笑むと「さて、この姿で文男の家に行ってみるか」

と、また紙袋を漁ると通学用の黒い靴を取り出し、ワンルムマンションを後にした。

ファスナーが見える胸元を片手で隠しながら文男の家に向かう北斗は、しきりに周りを気にしながら歩いた。

「俺って今、皆に女子高生だと思われているんだよな。あ、近所のオバサンだ……。いつもは挨拶してくれるけど、今日はシカトだな」

彼が近所に住む中年女性に視線を送っても、彼女は瑞菜の容姿を持つ北斗とは視線を合わさない。自分の体ではない事を改めて認識しつつ最寄の駅に着くと、スカートのポケットに入れていた財布から定期を取り出し、自動改札口を通った。特に不審がられる事は無く、初めての女性専用車両の乗り込む。

周りには北斗と同じセーラー服を着た女子高生達が数人乗っていた。興奮しながらドア付近に立ち、動き出した車窓を眺める。

「たままないよなあ。俺、堂々と女性専用車両に乗っているんだ。しかも周りには同じ制服を着た女子高生がいるなんて」

怪しまれないように女子高生達を見ながら、彼女達が話している会話を聞く。先生の悪口や彼氏の話が殆どだ。さり気なく胸元を隠しながら乗っていると、人が近づいてくる気配がした。

「あ、やっぱり瑞菜じゃない。部活、どうしたの？」

「えっ！」

肩を叩かれ振り向くと、同じ制服を着た女子高生が不思議そうな表情をして立っていた。面識の無い彼女に何と答えればよいのか分からない。

「サボったの？」

「あつ……え、えつと……」

「ん？ 今日試合に向けた練習があるから遅くなるって言つたのに」

彼女は首をかしげている。恐らく、喋り方からして友達か先輩だろう。

「あ、あの……」

面白い事に、慌てた彼が着ているタイトルの額から冷や汗が出てくる。まさに自分の皮膚と同化している感じだ。手にも汗が滲み出ているのが分かる。額の汗を見て「どうしたの？ 気分でも悪い？」と声を掛けてくれるものの、彼が口にした精一杯の言葉は「そ、その……ひ、人違いです」だった。

「えつ……うそ？」

「わ、私……瑞菜っていう名前じゃありません」

「うそでしょ。私達と同じ制服着てるし、その顔ってどう見ても瑞菜じゃない。声だって同じだし。からかつてるの？」

「そうじゃなくて、俺……っていうか私、ほんとにそんな名前じゃないし、人違いなんです」

目を見開き、信じられないといった表情をする彼女は「冗談でしょ。私分からないっていうの？」と問いかけた。

「は、はい……」

「溝柿だよ。溝柿幸恵だよ」

「は……はじめまして」

「うそそう。何年何組なの？」

「えつ？」

「瑞菜じゃないなら……あなた、私達と同じ高校でしょ。何年何組？」

「え、えつと……」

徐々に追い詰められてゆく感覚がとても嫌だった。素直に瑞菜として接していれば、適当に誤魔化せただろうか。そんな事を思っていると、何とか文男の家がある最寄の駅に辿り着いた。

「あの。ここで降りるから」

「えつ！ ちよ、ちよつと……」

自動ドアが開いた瞬間、一目散に階段を下りた北斗は改札口を出ると、ようやく振り向いた。先程の女子高生は追いかけては来ていない。

「焦ったあ。まさか瑞菜ちゃんの知り合いに会うなんて。でも、この時間は高校から帰ってくる生徒が多かつたんだな。まあ、ここまで来れば大丈夫だと思っただけ」

額の汗を袖で軽く拭き取った北斗は、また胸元を隠しながら文男の家に向かった。歩き始めてから十分ほどだろうか。住宅街にある彼の家に辿り着くと、周囲に人影が無い事を確認してからインターホンを鳴らした。

文男は北斗と同じ大学のサークル仲間だ。背丈は北斗と殆ど変わらないが、相撲が好きな彼は小学生の頃からどっしりとした体格で、体重は標準の子供よりも一・五倍ほど重かった。そんな文男は、高校に入ってから怪しげな研究を始めた。そして、実験が好きな彼は人が思いつかないよ

うな道具や薬などを自分の力だけで生み出した。夜中に菓子を食べながら寝る間も惜しんで実験していたため、本来は披露でやつれるべき体も、今では百キロに迫る勢いだ。

暑苦しい男。いつも汗を掻いていて、体臭が臭そうな男。そんなイメージの彼が迎えてくれると思っていた北

斗は、玄関の扉を開いた人物に言葉を失った。

「来たか、入れよ」

「えっ……」

目の前に現れたのは、北斗が着ている制服と同じセーラー服を着た女子高生だったからだ。肩ほどまである青い髪に茶色い瞳がとても印象的に見えた。

「早く扉を閉めろって」

「えっ、えっ……。き、君は？」

「いいから早く閉めろよ」

「あ……。はい。分かりました」

彼女に急かされ、思わず敬語で喋った北斗は急いで家に入ると玄関の扉を閉めた。

「俺の部屋に行こう」

「お、俺の部屋って……」

「いいからいいから」

彼女は早足に階段を上ってゆく。訳が分からない北斗も靴を脱ぐと、彼女の後を追って階段を上った。

「やっぱり胸元からファスナーが見えるんだな」

「あつ。こ、これは……」

文男の部屋に入った北斗が慌てて胸元を隠すと、彼女は「へへ。隠さなくてもいいって。俺だよ、文男だよ」と笑

いながら答えた。

「ふ、文男？」

「ああ」

「マ、マジ……で？」

「そうだよ。お前と同じように、タイツを着ているんだ」

「だ、だって……胸元にファスナーが付いていないじゃないか」

「ああ。俺が着ているタイツは最新バージョンだから、ファスナーを見えなく出来るんだ」

「……ほんとに文男なのか？」

「そうだって。信じないならタイツを脱いでやるけど、む

さ苦しい裸なんて見たくないだろ？」

「そんな台詞を口にするって事は、やっぱり文男なのか」

「信じたか？」

「ま、まあな。しかし、声と喋り方がアンバランスで気持ち悪いな」

「それはお互い様だろ」

「……で、お前が着ているその女子高生は誰なんだ？」

「ああ。これ、俺の妹だよ」

「へっ？」

「唯香って言うんだ。なかなか可愛いだろ。たまたま北斗の従妹と同じ高校だって分かったから、その制服も用意してきたんだぜ。唯香の名前を借りてこっそり買ってんだ」

「か、確信犯だな。でも、瑞菜ちゃんと文男の妹が同じ高校だとは全然知らなかったよ……っていうか、妹がいたこと自体、知らなかったし」

「言っただけ」

「聞いてないぞ。一言も」

「あつそ。ま、そんな事はどうでもいいじゃないか。それよりもどうだ？ そのタイツの着心地は」

「ああ。これってすげえよな。随分と背丈の違う俺の体がすっぽりと入っちまうんだから。それに、自分の皮膚と同じような感覚なんだ。神経が繋がっていて、まるで同化しているみたいだよ」

「へへ。我ながら素晴らしいタイツを開発したもんだよ」

「でも、こんなタイツをどうやって作るんだ？」

「お前が持ってきた髪の毛と写真から情報を得たんだよ」

「髪の毛と写真って……あれだけで？」

「そうさ。髪の毛からはDNAが取れるし、写真からは今の彼女の容姿が分かる。それらの情報があれば、このタイツを作る事が出来るんだ」

「じゃ、じゃあさ。アイドルのタイツを作る事もできるのか？」

「本人の髪の毛さえあればな」

「へ、へえ。お前ってすげえな」

「幾らでも褒めてくれて構わないぜ。へっへっへ」

妹である唯香のタイツを着た文男は、彼女の容姿には似合わない笑い方をした。

「でも、どうして俺にもファスナーが消えるタイツを貸してくれなかったんだよ」

「そりゃ、今はこの二着しかないからさ。作るためには金と時間が必要なんだ」

「……そうなんだ」

「いいだろ。お前が希望していた従妹の体になれたんだから。そのタイツ、女のオーガズムだって味わえるんだ」

「あっ！ そうそう、びっくりしたよ。タイツを着る時にちよっとクリトリスに触ってみただけで、俺の体じゃ感じる事が出来ない快感っていうか、感覚があったんだ」

「女のオーガズムはそんな程度じゃないぜ。気が狂いそうになるほど気持ちいいんだ。まるで麻薬みたいにさ」

「文男は体験したのか？」

「ああ、何度も何度も体験したさ。唯香や、唯香が連れてきた友達の体をコピーしてさ！ ああ、それから大学の女子達の体も楽しんだよ。足元に落ちていた長い髪の毛を片っ端から拾い集めて、分析結果が俺好みの女性ならタイツにしてオナるんだ」

「す、すげえや……」

「それだけじゃないぞ。例えば唯香で説明すると、髪の毛の情報から中学生の唯香や、大人に成った唯香を作り出す事が出来るんだ。兄が言うのもなんだけど、大人になった唯香の体はなかなかセクシーだったな」

「そんな事まで出来るのか。じゃ、じゃあ瑞菜ちゃんが大人になった状態のタイツも作れるって事か」

「簡単に作れるぞ」

「やつぱりすげえや。お前って天才だよ」

「だから、何度でも褒めていいぞ」

唯香の顔で嬉しそうに笑う文男を見て感心しっぱなしの北斗は、制服の胸元を引っ張り、改めてタイツの存在を確認した。

「これってタイツなんだよなあ。自分で着ていても信じられないよ」

「へへへ。折角だからこの姿のままでするうぜ」

「えっ……」

「女の体については俺の方が先輩だから、気持ちいいように弄ってやるよ。パイプも持っているから、膣の快感も味あわせてやるぞ。そのセーラー服を脱げよ」

「こ、ここでやるのか？」

「俺の部屋だから安心だろ？ 妹は友達の家で試験勉強をしているから最近帰りが遅いんだ。だから今日を選んだのさ」

「そうか。それなら……でも、すげえドキドキする。興奮するよ」

「俺もオナニーしかやった事が無いから、こうして女同士で弄り合うのはドキドキするよ。ほら、早く脱げよ」

「あ、ああ。分かった」

こうして北斗はセーラー服に手を掛け、唯香の姿をした文男の前で全裸になった。

喉元から下腹部まであるファスナーが付いたタイツを着る北斗を見て、文男が腕を組みながら目を細める。

「うん。他人がタイツを着ている姿を見るのは初めてだから妙な感じだよ」

「俺だっけ同じさ。それにしても、やっぱりこのファスナーは目立つよな」

北斗はファスナーを撫でながら答えた。引き手の金具に指が触れるたびに、カチカチという金属音が聞える。

「如何にもタイツって感じていいじゃんか。俺の着ているタイツなんて、見た目は全く分からないんだ。妹に成りすまそうと思えば簡単に出来るし」

「でもさ。その妹そっくりな声でも、喋り方ですぐに分かるよ」

「喋り方なんてどうにでもなるって。それに妹の事はよく分かっているつもりだし」

「ま、そういう事にしといてやるよ」
「んん？ 信じないのか？ それなら信じさせてやるよ」

ニヤニヤと笑いながら北斗の後ろに回りこんだ文男は、妹の腕で華奢になった彼の体を抱きしめた。

「お、おい文男。急に抱きつくなよ」

「……タイツ着てるけど、お兄ちゃんの友達なんだよね？」

「え？」

「私、妹の唯香。今日はよろしくね」

「あつ……」

妹の口調を真似した文男が、後ろから北斗の胸を揉んだ。他人に胸を揉まれる感覚に驚いた彼は、慌てて離れようとした。しかし、逆に強く揉まれて動けなくなった。乳首が押しつぶされ、体がビクビクと震える。

「ああっ！」

「気持ちいいでしょ。女の体って。すぐに乳首が勃起して、オマンコが濡れてくるよ」

「ふ、文男っ。お、お前っ」

「私、お兄ちゃんじゃないもん。お兄ちゃんはまだ大学から帰って来てないよ」

「うっつ。胸を揉まれると体に力が入らないっ。それにしてもマジで女っていうか、妹みたいだよ。喋り方ひとつでそんなに変わるんだ」

「うふふ。私、お兄ちゃんの真似をしてただけで、本物の妹なんだけど」

「へ？」

「上手だったでしょ、お兄ちゃんの真似。私、知ってたんだ。お兄ちゃんが怪しげなタイツを作っていた事。ずっと家族に隠していたつもりみただけだね」

「お、おいおい。冗談言つなよ。文男なんだろ？」

「幾らお兄ちゃんでも、ファスナーが見えないようなタイツなんて作れないよ。ちよつと恥ずかしいけど、私の体を見せてあげようか」

胸を解放された北斗は、慌てて後ろを振り向いた。すると、文男だと思っていた唯香が少し悪戯っぽい目をしながらスカートのファスナーに手を掛け、足元に落とした。少し内股になりながらセーラー服を脱いでゆく様に、文男の雰囲気は全く無かった。

「んしょ。どう？ ファスナーなんて付いてないでしょ」
白い下着姿になった唯香が頭の後ろに両手を添え、ポーズを取りながら彼の前で一回転する。滑らかな肌の何処を見てもファスナーらしき物は付いていない。

「まだ疑っているの？ それなら……」
何も言わない北斗に背を向けた唯香は、背中の中を覗き外してブラジャーを脱いだ。そして北斗の視線を気にしながらパンティを脱ぐと、恥ずかしそうに胸と股間を隠しつつ、北斗に全裸を見せたのだ。

「ど、どう？ これで分かった？」
「そ、そんな事言われても……」
「あの……。そ、そんなに見つめないで。恥ずかしいよ」
「あつ。ご、ごめん」

北斗は慌てて背を向けた。彼女の言動からは、本人にしか思えない。しかし、こうして彼の部屋で待ち合わせようと話したのは大学だったから、妹が知っているはずが無いのだ。完璧な妹に成り切っているのだろう。北斗はそう思った。

「ねえ。北斗さんは女になりたかったの？」
「まあ……そうだな。このタイツは俺が好意を持っていた

従妹 瑞菜ちゃんの姿なんだ。自分が瑞菜ちゃんに思うと、すごく興奮するよ」

「へえ、そうなんだ。何か変態みたいだね」
「それはお互い様だろ。妹のタイツを着て、そこまで成りすますんだからさ」

「あ。まだ疑ってるんだ。どうしたら信用してくれるのよ」

「信用するも何も、どう考えたっておかしいじゃないか。最初に喋りすぎてなかったら信じたかもしれないけどさ」

「お兄ちゃんの真似して喋った事？」
「ああ」

「私、高校では演劇部の副部長してるの。お兄ちゃんの真似なんて簡単だし、タイツの話なんて適当に作ったから嘘の話だよ。ほんとの作り方なんて全然知らないもん」

「へえ。じゃあ俺を楽しませてくれるって言うのも嘘だったのか？」
「あ……。そ、それは……」

「レズろうぜって言ったのはデタラメだったのか？」
「あの……。そういう訳じゃないけど、ちよつと口が滑っちゃって」

「口が滑ったくらいでレズろうとかパイプの話なんてしないで。普通の女子高生がそんな言葉を口にするはずないし、ほんとにしているならお前の妹って、かなりの変態だと思っけ」

北斗が後ろを向いたまま話していると、急に後ろから抱きつかれた。

「ああ。妹の事をそんな風に言わないで。もう、北斗の馬鹿あ」

「俺を騙そうとするから悪いんだ」

「ちよっと位いいでしょ？ 成りすますのって面白いんだから。でも、本当の妹に見えた？」

「ああ。仕草は本当の女性みたいに思えたよ。それだけ成りすませれば、両親だって欺けるんじゃない？」

「北斗も練習すればこれくらいのは出来るようになると思おうよ」

「別にそこまで出来るようになりたいとは思わないけどさ」

「そう？ 本人の代わりに家上がりこんで、他人の家族と暮らすのって面白いと思わない？」

「そうか？」

「例えば、瑞菜ちゃんが合宿とかでない時に、彼女に成りすまして彼女の家に上がりこむとか」

「そんな事してどうなるんだよ」

「他人を騙す楽しみが分からないかなあ。私、北斗さんを騙している時はすごく楽しかったけど」

「まだ妹の真似をしているのか」

「いいじゃない。北斗さんも、タイツの中身がむさ苦しい男だと思つと羨めるでしょ？ それなら私は唯香として対応してあげる」

「……ま、文男がそういうのなら俺は構わないけど。それにしても、完璧にフラスナーが見えない作りになっているんだな」

「そうだよ。継ぎ目なんて絶対に分からないでしょ。私の事、何度でも褒めてくれていいからね！」

「またそれかよ」

「じゃあ、ベッドに寝転んでよ。この舌を使って、全身愛

撫してあげる」

「まるで風俗店みたいだ」

瑞菜の顔で苦笑した北斗は、言われたとおりベッドに仰向けに寝転んだ。

「跨いじやおつと！」

妹のタイツを着た文男がベッドに上がり、北斗を跨ごうとした瞬間、彼は「ま、待てっ！」と叫んだ。

「えっ……何？」

「タ、タイツを着ているからって、お前の体重で押し掛かれたらたまらないよ」

「……んふふ。それって私が重いつて事？ 女の子に対して失礼だよ」

「だから容姿はお前の妹でも……うつつ！」

強引に跨つた文男に、北斗は瑞菜の顔を引きつらせた。潰れると思つたのだが、予想外に軽い。

「私の体重、四十キロちよつとなのに。これでも重い？」

「……お、重くない。これってどうなっているんだ？」

「そのタイツも同じだよ。タイツが模擬している体と同じ体重になるの」

「じゃ、じゃあ……本来、俺達が持っている重さは何処に行つたんだ？ 筋肉や脂肪はどうなつたんだ？」

「うふふ。それは企業秘密つて事で！」

文男は北斗の下半身に女座りしたまま、唯香の顔で悪戯っぽく笑つた。

「ほんとに体重まで軽くなるなんて、すげえタイツだな」

「そうでしょ。もっともつと褒めてくれていいからね！」

セーラー服を着た女子高生が体の上に跨つているというシチュエーションにそそられる。しかも、視線を下に移す

と、自分の胸にも女性の乳房が付いているのだ。その乳房を女子高生が掴み、優しく揉み始める。

「乳首、勃起してるね。北斗さん、興奮してるんだ」

「不思議だよなあ。興奮してドキドキしているのに、チンポが勃起する感覚が無いんだから」

「だって、今は瑞菜っていう女子高生になってるんだから。女子高生はチンポなんて付いてないでしょ」

「ああ。でも……うっ」

唯香の上半身が倒れ、瑞菜のタイツに舌を這わせ始めた。耳を甘噛みし、舌先で首筋を舐めている。そのゾクゾクする感覚に、北斗は身を震わせた。

「うっ……ん」

「気持ちいい？」

「な、何ていうか。くすぐったいような。はあ、あつ、はあ。うっ」

「脇の下も舐めてあげる」

細い指を絡ませながら脇の下を這う舌に、北斗は思わず「あんっ」と女性らしい喘ぎ声を漏らした。

「んふふ。北斗さん、ほんとの瑞菜ちゃんみたいな喘ぎ声だね」

「い、今の……俺が出したのか？」

「そうだよ。それが自然な喘ぎ声なの。もっと出してもいいよ」

わざと胸を外し、腹部や腰、そして体を反転させて背中やお尻を愛撫する。それでも北斗は、瑞菜のタイツが発する快感に蕩けそうになった。全身を舐められるだけでこんなに気持ちがいいとは思わなかったのだ。

「あつ、あんっ。はあ、はあ……あつ、あつ」

「可愛いよ、北斗さん。折角だから、瑞菜ちゃんって呼んであげるね。だから私の事も唯香って呼んでよ。今は女の子同士ってことで」

「俺が……瑞菜ちゃん？」

「そうだよ。だって、瑞菜ちゃんにしか見えないし。私も唯香にしか見えないでしょ？」

「あ、ああ……」

「すごいよ、瑞菜ちゃんのオマンコ。気持ちよすぎてエツチな涎が垂れまくってるもん」

膣口から溢れた透明な愛液を指で掬い上げた唯香は、興奮して顔を赤らめる北斗に見せ付けた。指の間にアーチを作る、粘り気のある愛液。これが自分の股から出ていると思つと、尚更鼓動が高鳴つた。

「もっと気持ちよくしてあげようか」

唯香は、北斗を仰向けに寝かせると迷わず胸に愛撫した。

「ふああっ！」

「んふっ。んんっ……んっ、んっ」

全身がビクビクと震える。女子高生の口が勃起した乳首に吸い付き、口内で舌を使っていやらしく舐め回す。もう片方の乳首も、指によつて捏ねくり回され、北斗に絶大な快感を与えた。

「あああっ！ あつ、うっ……ああっ」

「相当気持ち良さそうね」

「む、胸がっ……はあ、はあ、す、すげえっ」

「女の子はこんな風を感じる事が出来るんだよ。男のチンポとは全然違うでしょ？」

「き、気持ちよすぎるよっ。脳みそが蕩けそうだ」

「それじゃあ、瑞菜ちゃんの脳みそを完全に蕩けさせてあげる。でも、私も楽しませてよね」

「な、何するんだ？」

胸への愛撫をやめた唯香は彼を跨いだまま膝立ちすると、両手をスカートの中に忍ばせ、シミの付いた白いパンティを引き下ろした。そして片足ずつ上げて脱ぎ捨てる。と、体を反転させて北斗の顔の上に移動した。

「んふふ、シックスナインだよ。お互いのオマンコを舐めあうの」

「シ、シックスナイン……」

「どう？　これが私のオマンコ。多分、彼氏にしか見せた事がないんじゃないかな？　あ、それとお兄ちゃんにも見られちゃってるけど。お兄ちゃん、酷いんだよ。クスコを使って、膣の奥まで見るんだもん」

「お、お前。そんな事までしたのか？」

「私じゃないよ。お兄ちゃんが勝手にしたの。エッチだよねえ、妹のオマンコを奥まで見るなんて。でも、私だけじゃなくて他の女性になった時も覗いてみたい。形とか長さ個人差があるの。締め付け具合にも差があつて……あ、これって全部お兄ちゃんが言ってた事なんだけどね」

北斗は「そこまでよくやるよ」と呟きながら、目の前にある唯香の女性器を見つめた。瑞菜のタイツとは違い、縮れた短い陰毛がそれなりに生えている。足を開いているせいで陰唇が左右に開き、ピンク色の膣口が少し見えている。その上に小さな突起が付いている。これがクリトリスだろう。

「ねえ瑞菜ちゃん。先に私のオマンコを弄つてよ。私が瑞菜ちゃんのオマンコを弄つたら、瑞菜ちゃんは気持ちよす

ぎて何も出来なくなるかもしれないから」

「そ、そうなのか？　そんなに気持ちいいの？」

「タイツを着たときに、ちよつとだけ触つてみたんですよ？　その時とは遥かに違う感覚になると思うよ」

彼は、タイツを着る時にクリトリスに触れた事を思い出した。非常に敏感で、全身が震えた事を覚えている。でも、それはほんの少しのことだったので、先程胸を執拗に愛撫された快感と比べると、小さなものに思えた。

「そうかな？」

「そうだよ。とりあえず、私のオマンコを弄つてくれないうい？　クリトリスだけじゃなくて、膣の中に指を入れてい

いから」
唯香は、北斗を跨ぐように四つん這いになると、弄りやすいように腰を下げた。更に近づいた女性器にゴクリと唾を飲み込んだ北斗は、両手の指を使って陰唇を大きく広げてみた。

「どう？　私のオマンコ。まだピンク色で綺麗でしょ？」

「ああ、すごく綺麗だ。これが生のマンコ……なんだ」

「生のマンコだなんて、瑞菜ちゃんも相当エロいよね。学校でも女子生徒とエロい話をしてるの？　あつ……ん」

細い指が陰唇の中を上下に動き始めた。すでに滑った女性器は柔らかくて生温かく、瑞菜の指先を湿らせる。しかし、タイツに染み込む感覚は無く、本物の皮膚と同様に表側が濡れているだけだった。

「これが女子高生のマンコなんだ」

「んつ……。ん、あつ！　それ、クリトリスだからあまり乱暴に弄つちゃ……ああつ！」

北斗がクリトリスを摘むと、唯香の体がビクビクと震え

た。強弱を変えながら摘むと、唯香の口から面白いように喘ぎ声が漏れる。

「あつ、あつ、ああんっ。はあ、んううっ。はあ、あつ、あつ、あつ」

「そんなに気持ちがいいのか？」

「はあ、はあ、ああ。他人にクリトリスを摘まれるのってサイコーだよ。はあ、もうちょっとでイキそうだった」

「イク？」

「うん。女のオーガズムって、男の比べて遥に気持ちいいんだよ。今でも男で射精したときよりもずっとずっと気持ちいいし」

「へ、へえ。そうなんだ」

「次は膣の中に指を入れてよ。チンポみたいにね」

「い、いいのか？」

「いいよ。私、処女じゃないもん……っていうか、今の私はどっちでも関係ないしね」

そういうと、唯香は自らの指で陰唇を広げた。先程クリトリスを弄ったせいで、膣内から愛液が滴り始めている。

「ほら、早く入れてよ」

「あ、ああ」

北斗は、その愛液を絡めながら膣内へ瑞菜の指を忍ばせていった。

「んっ……ふう」

「生温かい……。それにヌルヌルしてる」

「一本じゃなくて、二本入れてよ」

「二、二本入れるのか？」

「うん」

その言葉に、北斗はもう一本指を入れた。人差し指と中

指が根元まで入ると、唯香は「はあ」と力なく息を吐いた。

「は、入ったぞ。二本とも根元まで」

「じゃあ、そのままチンポの様に出し入れして」

「痛くないのか？」

「全然痛くないよ。むしろ気持ちよすぎるから」

「じゃあ……」

少し戸惑いながらも、二本の指を出し入れする。すると唯香は「あつ、あつ」と気持ち良さそうに喘ぎ始めた。

グチュグチュといやらしい水音が膣の中から聞える。男の北斗にとつてはある意味、神秘的な光景であった。

「あつ、ああつ、あんっ。はあ、はあ。いいよ瑞菜っ。もっとオマンコ掻き回してっ」

「わ、分かった」

指の動きを速めると、唯香が更に激しく喘いだ。ビクビクと体を震わせ、背中を仰げ反らせる。肛門をヒクヒクさせながら快感に身を委ねる唯香の膣から、止め処なく愛液が溢れ、瑞菜の頬を伝い落ちた。

「あああつ！ あつ、あつ、イ、イクッ。い、妹の膣でイクッ！」

そのまま激しく膣を掻き回していると、唯香は瞬間的に顔を上げ、全身に力を入れた。そして「んあああつ！」と激しく喘ぐとオーガズムを迎えたのだ。

「イ、イツたのか？」

ぐったりと身を預けてきた唯香に問いかけると、大きく息を乱した彼女が「イ、イツた。め、めちやくちゃ気持ちよかったあ」と答えた。

「ケツが近いんだけど。もうちょっと腰を浮かせてくれな

いか」

「はあ、はあ。まだまだ。今度は直接舐めてくれよ……うん、舐めてよ。私も舐めてあげるから。ほら、足をM字に開いて」

文男の口調に戻りそうになり、言葉で訂正した唯香は更にお尻を下げて、瑞菜の顔に股間を密着させた。

「うぶっ……」

唇と陰唇が密着し、顎に縮れた陰毛の感触がある。気持ち悪いという感覚が先行したが、次の瞬間、北斗は唯香の目を見開いた。

「んはあっ！」

全身に力が入り、無意識にシーツを握り締めた。股間を舐められている。男の体とは格段に違う快感が襲い掛かってきたのだ。

「うああっ！ あっ、うあああ」

その強烈な感覚から逃れようとするが、唯香がしつかりと下半身を押さえ込み、全身の体重を乗せているので身動きが取れない。

「んぶっ！ んんんっ！ うぶぶぶ」

唯香はクリトリスを舐めながら、自らの股間を瑞菜の顔に擦り付けた。口が塞がれ、まともに声が出せない北斗は、目の前にある唯香の肛門を見ながらもがくしかなかった。胸への愛撫とは次元の違う気持ちよさ。まさかこんなに気持ちがいいなんて。

それが分かっていている唯香は、飴玉のようにクリトリスを舐めながら、膣の中に指を入れ始めた。

「んんっ！？」

体内に異物が入り込んでくる様子に北斗は再度、目を見

開いた。何もかもが初めての感覚だ。下腹部に力を入れようとしても、思うように入らない。唯香の指は、ゆっくりと膣内へと減り込んでゆき、根元まで入った。そして北斗がした時と同じように、二本目の指が入り始めたのだ。

「んんんっ！ んぶっ。んんんんんっ」

唯香の股間が顔に押し付けられる。シーツを握り締めていた手でセーラー服を着ている唯香の体を叩いて抵抗したのだが、彼女はそのまま根元まで指を入れてしまった。

「んぶっ。瑞菜ちゃんも処女じゃなかったんだ。最近の女子高生ってセックスの経験が早いんだね。それとも、私達みたいにレズって破っちゃうのかな？ ねえ瑞菜ちゃん。ずつと股間を擦り付けているのに、弄ってくれないの？ やっぱ気持ちよすぎて何も出来ないよね。シックスナイ

ンの意味がなかったかな。それじゃ、瑞菜ちゃんがイッたら、パイプを使って二人で楽しもうか」

その言葉を言うや否や、唯香は激しく指を動かして、膣内を掻き回した。わざとGスポットを擦るようにすると、瑞菜の体がビクビクと跳ねた。

容赦なく襲う女性の快感に、北斗は意識が飛びそうになった。すでに何十回とオナニーした感覚 いや、回数ではなく一度にまとめて何十回分のオナニーを体験したと言うほうが正しいかもしれない。しかも、それが絶えることなく続くのだ。そして、文男がいう女性のオーガズムは、もう一段高い次元の快感を北斗に与えた。

自分でも何を言っているのか分からない。耳に聞えるのは、瑞菜の狂った叫び声だけだった。それを自分が出しているのかさえ、分からなかった。

「あひっ！ ああっ、ああああっ、ああっ、あああっ、あああああっ！」

「プツンと頭のネジが切れた感じがした。そして、全身に感じていた唯香の重みがなくなり、意識が途切れた。」

「まるで天国に昇ったような気分だ。体がフワフワして心地いい。恐らく、これは夢なんだろうと思いつつながら何も見えない空間を漂っていると、ふと自分の体が従妹の瑞菜である事に気が付いた。」

「そうか。俺、瑞菜ちゃんのタイツを着ていたんだ。これが俺の体なんだよなあ。」

「上半身に走るファスナーを見ながら呟くと、下半身に妙な感覚を覚えた。」

「うっ……。な、何かが入ってくる。」

「足を開いて前屈みになり、自分のものとなっている女性器を見ると、膣口が自然に開いてゆく様子が分かった。何か透明なものが膣内へ入るうとしていた。」

「何だよこれっ。んっ……。うっうっ。」

「膣口が徐々に大きく広がり、膣内に空洞が現れる。明らかに何かが入り込もうとしているのだ。」

「や、やめろっ。入ってくるなっ！」

「快感に身を振りながら叫んだ北斗は、ハッと目を覚ました。白い天井が見え、見覚えのある部屋で仰向けに寝ている事が分かる。」

「ここは……。そ、そうだ。文男の家に来てたんだ。」

「少し頭を上げて体を見ると、ファスナーと瑞菜の胸が見えた。そして、M字に開いている足があった。」

「うっ……。はあ。な、何だよっ！」

「目が覚めても、下腹部に何かが減り込んでいる感覚があ

る。北斗が慌てて上半身を起こすと、信じられない光景があった。」

「ふ、文男っ？」

「目が覚めたんだ。イッた後に気絶したからびっくりしたよ。初めての快感に付いていけなかったんだね。」

「そこには、まだセーラー服姿の唯香を着たままの文男がいた。彼女は股の間に顔を埋め、北斗が着ている膣内に銀色の器具を入れていた。」

「な、何やってんだよっ！」

「見れば分かるじゃない。瑞菜ちゃんのオマンコを観察してるの。」

「そ、それ……。もしかしてっ。」

「そうだよ。オマンコの中にクスコを入れているの。これで覗けば子宮口まで見えるんだよ。瑞菜ちゃんのオマンコ、すごく綺麗だったよ！」

「か、勝手に瑞菜ちゃんの中を見るなよっ！」

「慌てて後ずさりすると膣内からクスコが抜け落ち、下腹部から満たされていた感覚がなくなる。」

「へへ。もう見ちゃったから。それよりも……。セックスしようよ。」

「ニヤリと笑った唯香は上半身を起こすと、スカートをゆつくりと捲り上げた。」

「なっ……。」

「これ、かなり気持ちいいんだあ。」

「マ、マジで？ 入れているのか？」

「そうだよ。残りの半分は瑞菜ちゃんの中に入るって事。」
「彼女の股間には、二十センチ近くはありそうな双頭パイプが付いていた。見た目で二十センチだから、彼女の膣内

に入っている部分を合わせると倍近くあるかもしれない。
「ちよ、ちよっと待てよ。そんなに長くて太いものが入るわけないだろ」

「大丈夫だよ。クスコが入ったんだから、このパイプも入るって。じゃあ、一つになる！」

「ま、待てよ。勝手に……うっ！んはあっ！」

両足を掴まれ、パイプの先端を膣に入れられた北斗は背中を仰け反らせた。指とは比べ物にならない太さのパイプが、ゆっくりと膣内へ減り込んでゆく。

「うあ……ああ。や、やめてくれよっ」

「そう言いながら善がつてるじゃない。もつと正直になつてよ。すごく気持ちいいんでしょ？」

「それとこれとは……んあああ」

「んんっ。私のオマンコにも減り込んできたっ。あゝ、すごい」

正常位の体勢でパイプを入れ始めた唯香が体を九十度傾け、互いの足を絡ませながら徐々に腰を前に押し出す。貝合わせの様な体勢だが、二人の膣には樹脂製の双頭パイプが挿じ込まれていた。流石に全てを飲み込むまでには至らず、数センチほどの膣体が見える状態で腰の動きが止まった。

「はあゝ。これ以上は入らないみたい。ねえ瑞菜ちゃん、オマンコの中がパイプで一杯になってるでしょ」

「はあ、はあ、ううっ……」

「瑞菜ちゃんはその快感に慣れていないから、私が動いてあげるよ。さっきイッたばかりだから、またすぐにイッちゃつかもね」

そういうと、唯香は自ら腰を振り始めた。ゴリゴリとい

うパイプの感覚に、北斗はまた背中を仰け反らせた。
「んあっ！あつ、あつ、何だよこれっ！す、すげえっ」

「はあ、はあ、はあ、あつん。気持ちいいでしょ。男とセックスするとこんな感じになるんだよ。んあつ、私はした事ないけどっ」

「ああ、あつ、あつ、中が抉られてっ……ああっ」

堪らず上半身を倒した北斗は、細い足を浮かせて指の先に力を入れた。その足の片側を掴んだ唯香がいやらしい腰つきで双頭パイプを挿じ込む。互いの膣内からグチュグチュという水音が聞え、とめどなく愛液が滴り落ちた。

「あつ、あつ、あつ、ああっ」

「はあ、はあ、あんっ……はあ、はあ。あつ、どう？気持ちいいでしょ」

「うっ、ああ、ああ、はあ、はあ、あつ、あつ、ああっ」

北斗は膣から湧き上がる快感に返事も出来ず、女の子の様に喘いでいるだけだった。先ほど感じたオーガズムが迫る感覚がある。文男も、妹の膣がオーガズムを放とうとしている事が分かったのか、腰の動きを速めた。

背中を仰け反らせ、必死にシーツを握りながら悶える北斗は、本物の瑞菜としか思えないほど女の子らしかった。

乳首が勃起し、口から涎を垂らしている。空いている手でパイプを飲み込む膣の上、クリトリスを弄ると、瑞菜の体が跳ね上がった。

「ひうっ！ああ、あああつ、はあ、はあ、ああああっ」

「はあ、はあ、可愛いよ瑞菜ちゃんっ。その声を聞いてい

ると、も、もうっ！」

「ああっ、あんっ、はんっ、あっ、あっ……ああっ」

「ファスナーについている引き手の金具がカチカチと鳴り、レズセックスの激しさを物語っていた。いつの間にか双頭パイプの全てが互いの膣に飲み込まれ、膣同士が触れ合っている。

「狂ったように腰を振る文男は、顎を上げながら「あああああ〜！」と声を上げ、オーガズムに達した。それと同じく、北斗も激しく膣を突かれて絶頂を迎えたのであった。互いに体をビクビクと震わせると、文男が膣からパイプを抜きながら北斗の横に寝そべった。

「はあ、はあ、はあ。レズセックス最高だあ〜」

「はあ、はあ……はあ、はあ」

その言葉に、北斗はただ頷くだけだった。

それから二十分ほど経った部屋では、セーラー服を身に纏った二人が床の上に胡坐を掻いて座り、何やら良からぬ話をしていた。

「ファスナーが付いていないタイツをもう一つ作るのに、

どれくらい時間が掛かるんだ？」

「そうだな。半年は掛かるけど」

「そんなに掛かるんだ」

「だって、俺が着ているタイツは二年掛かったんだから。一度作ったものをコピーするから、半年で出来るんだ。これでも随分と早いんだぞ。それに金も掛かるし」

「……へえ〜。俺もファスナー無しのタイツを着てみたいんだけど」

「このタイツ、貸してやるうか？」

「い、いや。文男が着た後のタイツは着たいと思わない。想像するとキモイから」

「何だよ。北斗が着ているタイツだって、俺が何度も着たやつなんだぞ。オナニーだってやりまくったんだからな」

「い、言つなよっ！ 蕁麻疹が出そうだ」

「そこまで言わなくてもいいだろ。そりゃ、タイツを脱いだ後はちよつと汗臭いかも知れないけどさ」

北斗は途中から耳を塞いでいた。

「……ま、いいか。今度、ファスナー無しのタイツが出来たら北斗にやるよ。でも、誰のタイツにするかは俺が調整しなくちゃならないから」

「ああ」

「で、ファスナー無しのタイツを手に入れたら誰になりた

いんだ？」

「さつきさ。年齢を変えたタイツを作れるって言うてただ

る？」

「そうだな」

「俺、大人になつた瑞菜ちゃんになつてみたいんだ」

「説明した時にそう言つてたな」

「瑞菜ちゃんがどんな女性になるのか見てみたいし、その姿で外を歩いてみたいんだ」

「そして男とセックスするってか？」

「……それもしてみたいな。電車で痴漢されてみたいし」

「お前つてMなんだな」

「そ、そういうわけじゃないけどさ」

「俺が着ているタイツならすぐに実現できるのに」

「だからさ……」

「分かった分かった。じゃあ半年後を楽しみにしてくれよ」

「ああ、頼んだぜ」

こうして話がまとまり、北斗が帰ろうと腰を上げると、

「ただいま〜」という女の子の声が聞こえた。

「えっ！ も、もしかして」

「ヤバイ。唯香が帰ってきたぞっ。アイツ、友達の家で試験勉強してくるって言ってたのに」

「ど、どうするんだよ」

「どうするんだよって、どうしようもないだろ」

「文男はヤバイだろ。格好じゃ……」

「っていうか、どうしてこんなに早く帰って来るんだよっ」

慌ててセーラー服を脱ぎ、口を開いて指を入れた文男

は、その指を勢いよく左右に広げた。すると口が大きく伸びて、唯香の中から男の顔が現れた。

「うわっ！ な、何だよそれ」

「このタイツは口から入るように作っているんだ。だから口が異様に伸びるんだ」

そのグロテスクな光景に、北斗は思わず顔を背けた。小さな体から巨漢が出てくる様は、この世の物とは思えないほど奇妙に思える。

「は、早く脱げよ」

「分かってるって。よいしょっつと」

何とかタイツを脱ぎ、セーラー服と共にベッドの下に隠したところで、部屋の扉が開かれた。

「お兄ちゃん、私と同じ学校の靴が玄関にあったんだけど、あれって……」

喋りながら部屋の様子を見た唯香が、時間が止まったように動かなくなつた。ベッドの横に立っている見苦しい巨漢の裸に、同じ学校のセーラー服を着ている女の子。

「あつ……ゆ、唯香。これは……」

慌てて胸元を隠した北斗は、ピクピクと口を歪めて半笑いしていた。

「……き、きゃあ〜！」

後から北斗が聞いた話によると、あの状況を説明するために相当の苦勞をしたらしい。妹と同じ学校の女子高生を部屋に入れ、目の前で裸になっていたという事実が両親の耳に入り、相当絞られたという。

どうやら、北斗がフアスナー無しのタイツを手に入れるのは、随分と先になりそうだ。